

加藤 久典 教授

**インドネシア社会にある、  
他者を受け容れる寛容性。  
日本と世界が学ぶべきその価値を、  
地道な現地調査と研究を通じて、  
肌で感じ学んでほしい。**

インドネシアと聞けば、貧困やテロの危険、治安の悪さなど、悪いイメージが先に浮かぶかもしれない。

加藤先生は、約二十年前外国で暮らしインドネシアなど東南アジアには約10年間暮らし教壇にも立った。それらの実体験と、その後の研究活動を通して、インドネシアに学ぶべき価値観があると考えている。多民族と多言語のこの国は、「多様性の中の統一」を掲げ、共存のための努力を続けている。世界で最も多いムスリム（イスラーム教徒）を抱えるインドネシアは、イスラーム理解という点においても大変重要だ。

インドネシアを訪れて人々の生活や宗教などを知るフィールドリサーチを踏まえ、その価値を発見し学んでいくプロセスは魅力いっぱいだ。

**ムスリムとイスラーム  
という2つの社会**

加藤先生の専門は広く東南アジアに及び、カンボジアやフィリピンでも調査を行うが、研究の中心はやはりインドネシアだ。そこで、インドネシアに学ぶべき価値を訊く前に、インドネシアという国の特色からまず説明いただいた。

「インドネシアは、人口が約2億5千万人で世界第4位、また約1万7千にも及ぶ島々を領土とし、ヨーロッパ全体に匹敵するほどの面積を

誇る世界一の群島国家です。そして、300を超える種族と500を数える地方言語をもつ多様性を特色としています。一方で人口の85〜90%が

ムスリム（イスラーム教徒）で占められているのですが、私の研究テーマは、そんな多様なインドネシア社会で宗教（イスラーム）がどんな役割を果たしているか、にあります。

イスラームを信仰する人々を「ムスリム」と呼びますが、私はインドネシア社会全体を、そのムスリムから見た「ムスリム社会」と、「イスラーム社会」の2つの側面から捉えています。

イスラーム社会とは、イスラームの聖典・コーランに忠実であろうとする理念的な世界を指します。（コーランやイスラーム法「シャリヤ」を規範とする社会構築を目指す）イスラーム原理主義者はこの世界の実現を目指している人々ということもできます。

一方で、ムスリム社会のムスリムとは、イスラームを信じる人々、つまり人間としての存在を示します。イスラームを信仰しながらも、生活のなかで柔軟に対応している一般大衆と言えます、その割合も圧倒的です」

ついて、分かりやすい例を挙げていただいた。

「『ラマダン月に約1カ月間、夜明け前のお祈りの時間から日没時のお祈りまで断食する、という教えがあります。その断食月が終わる時にムスリムの人々は里帰りをします。日本のお盆のような感覚ですね。決してお祭り騒ぎをする時期ではないのですが、新しい洋服を買ったりして楽しんでいきます。また、ムスリムの人たちは墓参りをしますが、実はイスラームでは先祖崇拜が禁じられているのです。もちろん、これらの行為は、書かれた教えを最優先する理念



**加藤 久典 (かとう ひさのり)**

1988年、法政大学文学部哲学科卒業。96年、シドニー大学人文学部大学院修士課程修了、2000年、同大学同学部博士課程修了。03年、マニラ国際高校教師、04年ナショナル大学客員教授(ジャカルタ)、09年大阪大谷大学人間社会学部非常勤講師、11年に大阪物療大学保健医療学部教授。15年より現職。「Islam di Mata Orang Jepang」(日本人からみたイスラーム)や「Agama dan Peradaban」(宗教と文明)など著書多数。

的イスラーム社会を目指す人々は、行いません。しかし、どちらもイスラームという宗教を信仰していることに変わりはないのです」  
コーランというイスラームにおける根本的な指針がありながら、柔軟に対応して暮らすムスリムの人たち。この柔軟性こそ、インドネシア

**共存に向けて努力する  
姿勢に学ぶ**

社会の核をなしていることが、次の説明でより分かってくる。  
加藤先生が考える、インドネシアから日本が学ぶべき価値とは。柔軟

性から生まれるその独自の内容について伺った。  
「日本政府はインドネシアに援助をしていますし、日本の方が優れている日本の方が上であるという意識が多様性のなかで共存を図ろうと努力するインドネシアの姿勢は、私から見れば、多様な人種・宗教・価値観のなかで共存を目指す世界の縮図にも思えます。  
インドネシアには『ビネカ・トゥンガール・イカ』という言葉がありませんが、これがまさに「多様性の中の統一」という意味です。多言語社会でありながら、バハサ・インドネシアという国語を設け、学校教育などを通してすべての国民が使用でき、意思疎通を図れる工夫も行なわれています。また、ムスリムが約9割を占めながらも、キリスト教徒や仏教徒、ヒンズー教徒の存在を認めてイスラーム法を国法とはせず、ごく一部の地域と分野を除いて世俗(非宗教)の法律で治めています。インドネシアのジャワ島にあるポロブ



先生が着ているのは「パティック」と呼ばれる、ろうけつ染の生地で作られたシャツ。「ジャワ更紗」とも呼ばれる独特の風合いが特産として有名だ。

ドゥールは仏教遺跡であり、ヒンズー教やアニミズム(精霊崇拜)など、多様な宗教の歴史が刻まれています。インドネシアは、そのような歴史も重んじながら、14〜15世紀に広がったイスラームとそれ以外の宗教を大切にしているのです。  
さらにインドネシアには『パンチャシラ』と呼ぶ5原則があります。初代スカルノ大統領が、1945年



インドネシアという共通の価値で結びついていく学生たちは、やがてその価値に磨かれ成長していく。

の独立時に国是として憲法で定めたもので、(1) 唯一神の信仰 (2) 人道主義 (3) インドネシアの統一 (4) 民主主義 (5) 社会正義の5つから成り立っています。このような目標を掲げながらインドネシアの人たちは、『違った民族、宗教をもっているけど、みんなで共存しよう』と努力し続けているのです」

実は、インドネシア社会の根幹を支えるこの『ビネカ・トゥンガル・イカ』と『パンチャシラ』という2つの言葉は、いずれもアラビア語ではなく、サンスクリット語なのだそう。ここにも多様性を認めるイン

ドネシアの姿勢がうかがえる。「多数派であるイスラームがそのほかの宗教とどのように共存するのか、また近代化が進み急速な変化を遂げる社会で伝統的価値観がどれほどの意味をもつのか、といったことも興味深いテーマです。人々の暮らしの中で、イスラームがどのような意味をもち、ムスリムがどのようにイスラームを信仰しているのかというのを今後も追求していきたいと思っています」

### 心の深さと寛容性を 体現する人々

人々の共存を目指すインドネシアという国の姿勢について説明いただいたうえで、ムスリムを含むインドネシアの人たちの柔軟性について、改めて具体的に伺った。

「私がインドネシアの人々に感じるのは、心の深さです。それは言い換えれば、異なるものを受け容れる寛

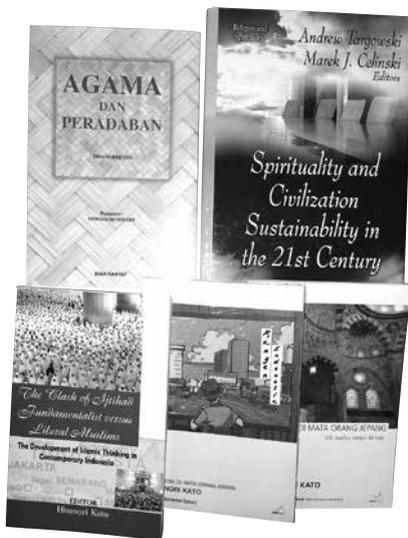
容性とも表現できます。しかもそれを可能にする知恵を身に付けていて、実際に、国語で寛容を意味する『トレランシ』という言葉を大切にしています。日本のいじめについて訊くと「豊かな国で信じられない」と言いますが、インドネシアには、集団から外れる存在を排除するようないじめはめつたに見られません。

300を超える種族と言いましたが、ジャワ島を例に挙げても中部ジャワ人、東ジャワ人、スンダ人、プタヴィ人、バンテン人などに分かれます。このような国だからこそ、インドネシアの人々は、相手がどこから来たかを常に気にします。それだけ一人ひとりが自

らの出身にアイデンティティをもっているのです。そうした背景を踏まえつつ人々は、寛容なコミュニケーション能力の高さを発揮します。ゼミの学生が現地調査でまず驚くの

は、人々が物おしせず普通に話しかけてくること。私も、初めて訪れた当時、言葉が通じなくても話しかけてくる人なつこい国民性には驚いた経験があります。また、ラマダン明けの夕方のバス車内で、水筒を出し他人同士がごく自然に水を分け合う光景は、いまでも強く記憶に残っています。

インドネシアは約300年間、オランダに占領され、日本にも占領された歴史がありますが、45年の独立に際し世俗体制のもとでインドネシアという国家のアイデンティティを大切に戦後を生き抜こうと決めました。自らのアイデンティティを大切



英語やインドネシア語の著書も多い。インドネシア社会や宗教を分析した「Kangen Indonesia」は大きな話題を呼んだ。

にしながら、インドネシアとして共存を創りあげようと努力する人々の叡智には、ゼミの学生も強いメッセージを感じています」

## 現地のフィールドワークで住民の生の声を聞く

加藤先生のゼミは、もちろんインドネシアでの調査が欠かせない。それはどのようなステップで進められるのだろうか。

「私たちは、フィールドに出て、自ら観察することを重視しているので、基本的に春・夏年2回、10泊程度の現地合宿を開催します。

比較する意味で、例えば春合宿では、同じ東南アジアのフィリピンに、夏はインドネシアにフィールドリサーチに出かけるといふ具合です。その他カンボジアなどを訪れます。参加学生は、事前に調査するテーマを決めておきます。これを踏まえて現地でのスケジュールを組み立て、街に入って人々にインタビューしていきます。また、主に宗教を管轄す

る『宗教育』を訪問しディスカッションを行ったり、現地の大学と合同で「学生フォーラム」を開催し、宗教意識などについて学生が互いに発表し、ディスカッションする機会もあります。フィールドリサーチにおいては、たまたま現地のお祭りや遭遇し、インタビューするうち「一緒にやったら？」という声に、そのまま祭りの輪に入るなど、インドネシアの人たちの人なつこさを体験する機会も多くみられます。ただ、いずれにしても学問ですから、個別の事象を取り上げるだけでなく、そこから普遍的な価値を見出すプロセスは切り離せません。そして最後には自分自身と向き合ってほしいのです。フィールドワークの『フィールド』は、人生であり、世界であると言っていると思います。だから、フィールドワーカーとして人生を生きる際の価値を、研究を通して身に付けてほしいと思います」

そんなゼミでの学びについて、加藤先生は改めてこう言います。「貧乏でかわいそうで汚い国、危な

い国などというステレオタイプな見方を信じるのではなく、裏に隠された彼らの価値観を発掘して自分たち自身の生活に活かしていくというのがゼミの大きなテーマです」

実際に「(自分が)変わりました」と言うゼミ学生は多い。まだ見ぬインドネシアの価値に、フィールドワークを通して出合い自分自身の成長に結び付ける。そんなチャンスが待っている。

### 高校生の皆さんへ

大学で学ぶということは、「事実」

と「真実」を見極めることであるとあります。事実とは、目に見えている表層にあり、真実は目に見えない内面にあります。大学での学びは真実を見つけるプロセスで、それは本当に価値があり必要なことだと思えます。単に誰かが言ったとか、本で読んだとかで判断するのではなく、そうした目に見えない裏に隠され

たものをきちんと見ていくことが求められます。私の好きな作家の言葉に「千キロ離れた場所へ行くことは、物理的に千キロ離れた場所に行くという行動だけではなく、自分の心の中を千キロ回ることでもある。それが旅だ」という言葉があります。皆さんも、フィールドワーカーとしてインドネシアを訪ねることになりますが、それだけでなく自分自身の心を見つめ直す機会をもってほしい。私は、いつの時代も若者は変わらぬ、と思っています。みんな素晴らしい感性をもっている。だからこそ、大いに期待しています」



現地でのフィールドリサーチでは、住民と積極的にコミュニケーションを取りながらインドネシアの人々の考え方や生活についての情報を吸収する。